



受動的な学習から能動的な学習を目指して

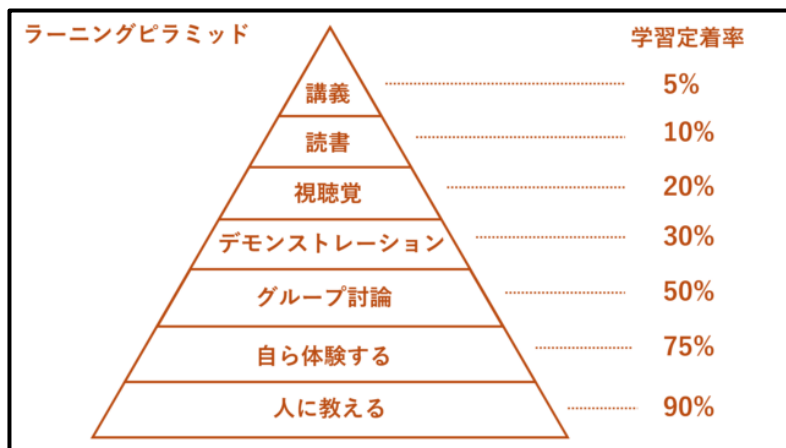
校長 村元 孝憲

関東甲信越地方は6月7日に梅雨入りしました。あれから1か月。今年は雨天や曇りの日が多く、梅雨らしさを感じる毎日です。7月に入り、これからは特に暑さ指数(WBGT)を気にしながら活動を進めていく必要を感じます。また、改めて先月行われた学習参観にはたくさんの保護者の方々に来校いただき、感謝申し上げます。学習の様子からお子さんの成長を感じられたのではないのでしょうか。

7月に入ると夏休みが待ち遠しいという子どもたちの声が聞かれるようになります。今年度は実質、7月18日(土)から休みに入りますので、45日間の夏休みが待っています。入学当初は不安な表情を見せていた1年生も、今ではすっかり学校生活に慣れ、給食の準備や掃除も分担しながら進められるようになってきました。

さて、「時間をかけて勉強しているのに、内容がなかなか覚えられない」という経験はありませんか？それは受動的、消極的に学習に取り組んでいるからかも知れません。アメリカ国立訓練研究所の研究によると、学習方法と平均学習定着率の関係を、「ラーニングピラミッド」という図で表しています。(右図参照)

学校ではいろいろな授業の形がありますが、この図によれば、「講義」形式での平均定着率は5%。席に座って教師の話聞くだけの状態です。「視聴覚」は動画や音声、ギガタブの視聴も含まれますが、20%にとどまります。「グループ討論」では50%。友達とのディスカッションやテーマを決めてのディベートを行い、能動的な関わりをすることで、



新たな知識や学習の定着が図れます。75%の「自ら体験する」とは、体育や音楽、図工などの実技教科において、実際に手や体を動かし、感覚的に学ぶことが多いものになります。また、校外学習や宿泊学習を通して現地で学ぶものも含まれます。そして最も学習定着率が高い「人に教える」では90%となります。物事を人に教えるためには、自分自身で学習内容を理解し、質問を受けた時も答えられなくてはなりません。このように、受動的な学習から能動的な学習を実践することを、文部科学省では以前、「アクティブラーニング」と表現していましたが、現在では「主体的・対話的で深い学び」を目的として位置付けています。子どもたちには夏休みを通じて多くの経験を積み、9月からは更に「かかわり合える子」になってほしいと思います。